

本会記事

「団体間連携」日本粉末冶金工業会との連携

当会尾崎会長の就任挨拶の中で「連携」をキーワードとして「国際連携」、「団体間連携」そして「会員相互の連携」3つの連携構築についての話がありました。「国際連携」は、昨年開催したWORLD PM2024においてもEPMA、MPIF、APMAの協力を得て取り組むことができました。WORLD PM、APMAの国際会議開催をはじめ、今後も三団体間の取り組みに協力していきたいと思います。また、「会員相互の連携」については、2年前より取り組んでいる分科会組織再編を2025年度中に纏める予定です。再編後の活動で「会員相互の連携」がより活発なものになるよう進めたいと思います。

今回は、3つの連携の内の「団体間連携」について触れたいと思います。様々な学協会、工業会との関わりの中、特に日本粉末冶金工業会と当会は70年超の長きにわたり連携を図ってきました。工業会と協会の成り立ちが当会20年史「協会発足までの歴史（当時の会長 鹿取一男筆）」に記されていますので、ここに一部抜粋、紹介します。

昭和27年9月に名古屋工業技術試験所が中心となって名古屋粉末冶金研究会が組織され、勉強会的な研究や知識の交流の場ができ、その後粉末冶金の研究に取り組んでおられた京都大学岩瀬（慶三）先生たちを運営に招き入れ、研究会が発展していきました。

（以下本文より抜粋）『前述の名古屋粉末冶金研究会は年とともに充実した活発な活動を展開するに至った。そしてこんなことが契機となって粉末冶金の企業化が盛んになってきた。ところが当時この企業を行政的に援助する通産省の主務課がなく、企業はこれを望むこと切なるものがあつた。研究会の世話役の一人であつた私は、当時の鑄鍛造品課長の重見通雄さんを説いて2人で法令審査室まで出かけたが、とうとう昭和29年1月に鑄鍛造品課が主務課になってもらうことができた。（中略）昭和29年6月に学界、官庁、業界を一丸とする粉末冶金技術研究会を作り、事務局を鑄鍛製造課が引き受けてくれ、ここに岩瀬先生を会長としてお迎えしたのである。（中略）』

この研究会は企業育成を目的とする通産省に事務局を置いたので技術の進歩とともに企業の振興の2面を推進したが、昭和31年4月に企業サイドの事業を行っていた事業部は独立して粉末冶金工業会になった。事業部を分離した研究会は学会としての性格となつてきたためにその10月に京都大学に事務局を移転した。これで粉末冶金技術研究会（後の粉体粉末冶金協会）はこの分野の学会としての性格を明確にしたのである。』

こうして日本粉末冶金工業会と当会との長い歴史が始まりました。その後それぞれの歩みを進めて行く中で、1993年、初めて日本で粉末冶金国際会議を開催することになり、工業会から協力の要請を受け、現在と同様に論文発表を取りまとめる技術委員会を当会が担うことになりました。PM93開催を機に工業会との連携は強いものとなり、その後、2000年、2012年と昨年開催したWORLD PM2024の4回の粉末冶金国際会議を開催するに至りました。

連携は国際会議だけでなく、1996年度より工業会賞受賞記念特別セッションを当会春季大会の初日に設けています。当会春季大会の場で開催されることは、当会会員にとって企業の先端技術の紹介を聞くことができ、また、双方会員の交流を深める場として役立っていると思います。

また、PM2000開催後の2003年より10年間、工業会のPM研究促進展が行われました。本事業は、大学や公設研究機関等における金属系粉末冶金分野の研究促進と工業会会員との産官学交流を活性化させることを目的とし、当会秋季大会でポスター展示による研究発表が行われました。当会会員から10年で143件の研究成果発表の応募があり、工業会会員の興味のある研究41件に対し工業会より奨励金が授与されました。産学連携を目指して支援を頂きましたが、残念ながら受賞内容が工業化されたものはなかったとのことでした。

その他、粉体粉末冶金用語辞典や粉体粉末冶金便覧の編纂には多大な協力を頂きました。今後も日本粉末冶金工業会との連携は続きますが、今年度工業会、当協会共催で粉末冶金技術イノベーションプロジェクトを立ち上げ、先般会員への説明会を行いました。本プロジェクトは、産官学の連携により粉末冶金技術の革新並びに粉末冶金業界の核となる人材育成を図るため、All Japanの体制で研究開発を行うことを目的としています。双方の会員から開発テーマを募り、プロジェクトの参加を呼び掛けています。今後も日本粉末冶金工業会と協力し、粉末冶金の研究、技術の情報発信、会員相互の交流の場を提供していきたいと思っています。

（井上羊子）